

独居生活に向け AMPS による評価と支援を行った事例の紹介

○ ナカモトヒサユキ 中本久之(OT)¹⁾ 武田沙知(PT)¹⁾ 野本達哉(MD)²⁾ 反町香代(Ns)³⁾ 岩谷清一(OT)⁴⁾
大嶋伸雄(OT)⁵⁾

1) 永生病院リハビリテーション部 2) 永生病院診療部 3) 永生病院看護部
4) 永生会法人本部統括管理部 5) 首都大学東京大学院人間健康科学研究科

【はじめに】

AMPS (Assessment of Motor and Process Skills) は、ADL/IADL の評価法で、16 の運動技能と 20 の遂行技能を測定する。難易度の異なる 116 の課題から 2 課題をクライアントと選択し観察評価を実施する。また、地域で自立生活を送るために必要とされる cut off 値 (運動 2.0, 遂行 1.0) が設定されている。今回、独居生活に向けた作業療法において AMPS を用いた評価と支援を行ったので報告する。なお、発表に際し個人が特定されないよう記述内容に留意し、当事者及び主治医の了承を得ている。

【事例紹介】

80 代男性。消化管出血、脱水、急性腎不全により自宅での日常生活が困難となり、急性期病院に入院。その後当院に転院し、独居生活を目指して歩行練習や日常生活の練習を行った。入院当初は運動耐用能が低く、起居動作や平行棒内歩行において血中酸素飽和度の低下が認められた。また、筋力・バランス能力の低下により歩行移動における転倒の危険性があった。数年前に伴侶を亡くし、それ以降はヘルパーの援助と配食サービスを利用して自宅で独居生活を送っていた。

【AMPS による評価 (入院 1 ヶ月目)】

自宅生活において、ヘルパーの支援を受けずに自身で行うべき家事活動として「朝食の準備」「1~2 品のおかずの追加」「インスタントの飲み物の準備」が挙げられた。類似する課題として、AMPS 課題から「ジャムサンドイッチ」と「インスタントの温かい飲み物」を選択し、観察評価を行った。結果は運動技能が 0.54、遂行技能が 0.03 だった。立位活動における著明な疲労、歩行移動やかがみ動作における努力の増大があり、各行程における効率性も低く 1 課題の遂行に 30 分程度と多くの時間を要した。

【介入の経過 (～入院 3 ヶ月目)】

入院以降、家事動作は評価以外で行っておらず、伝い歩きでの物の運搬や、台所でりんごをむいて皿に盛り付けるなどの練習を行い家事活動に慣れて頂いた。また、物の運搬やリーチ動作に対しては効率的な代償動作を提案した。経過の中で運動耐用能にも改善が見られ、病院内を歩行車使用で移動できるようになった。りんごの盛りつけでも手際がよくなり、疲労もみられなくなった。退院直前の再評価でも初回と同じ課題を選択した。運動技能が 1.08、遂行技能が 1.08 と共に点数が向上し、遂行技能は cut off 値を上回った。2 課題をほとんど疲労なく 30 分程度で完遂することができ、朝食の準備としても十分実用的となった。退院後 1 ヶ月経過した時点で、朝食の準備などは継続できているとのことだった。

【考察】

自宅で行う活動を AMPS に基づいて評価することで、クライアントと課題を共有でき、日々の練習の動機付けにつながった。例えば炊事をすることで疲れ易いことを自覚し、病棟での歩行を積極的に行っていた。また、AMPS は課題が難易度別にリストになっており、1 人でできそうなことの見通しを立てることに役立った。今回、比較的簡単な家事を行えたことで、難易度の近い洗濯機の操作はできそう、難易度が高い買い物はヘルパーに依頼したい、と退院後の生活をイメージされていた。このように、クライアントと課題を共有することや、生活の見通しを立てることに AMPS の活用は有用と考える。